

ソ連時代のアネクドート

—「アルメニア・ラジオ」シリーズ—

塚崎 今日子

1. はじめに

「ソ連」という特殊な時空間において最も人口に膾炙し、また独自の発展を見せたフォークロア・ジャンルとしては、チャストゥーシカとアネクドートが挙げられる。本報告では、後者アネクドートを取り上げる。アネクドートという語は18世紀にロシア語に入ってきてから今日に到るまで使われ、ロシア人であれば、またロシアと関わりを持つものであれば、それが意味するものを即座にイメージできよう。しかし、その茫洋とした全貌、すなわち多岐に渡るテーマ、さまざまな内容や形式、隣接するジャンル（たとえば昔話）との曖昧な境界、そして何より「ソ連」という時代的な制約もあり、他のフォークロア・ジャンルに比べると、ロシアでも研究が立ち遅れた分野といわざるを得ない⁽¹⁾。とはいえ、1980年代のペレストロイカ、1991年のソ連崩壊からかなりの時間がたった現在、アネクドート研究を進める状況はますます整い、その成果が着実に現れつつあるといえる⁽²⁾。

「ソ連時代のアネクドート」は、アネクドートという膨大なジャンルの中でも、「ソ連」という特殊かつ緊張感に満ちた時空間の中で起こった独自の現象として捉えることができる。しかしその一方で、伝統的なフォークロアとの密接な繋がりも見逃すことができない。本報告では、ソ連時代のアネクドートの形式に注目した上で、この時代に生まれた「アルメニア・ラジオ」と呼ばれる一連のアネクドートについて、その形式、歴史的趨勢、背景を概観する。

2. アネクドートの形式

アネクドートの形式は、(1) 叙述型、(2) (叙述+) 対話型、(3) Q&A 型の三つに分けることができる。

-
- 1 2001年の今田氏の報告によれば、アネクドート研究の必要性がいちはやく指摘されたのは、1979年、シニャフスキーによってであった。その後、体系的なアネクドート収集と考察が始まったのが1980年代後半、本格的な研究開始は1990年前後からとされ、10編のアネクドート論が紹介されている〔今田、2001〕。その2年後、今田氏によっても取り上げられたアネクドート研究者の一人、ベラウソフがロシアにおけるアネクドート研究の成果について書いている〔Belousov, 2003〕。しかし、1993年、1997年に発表された博士論文以外は、今田氏が挙げた例を大きく上回るものではない。
 - 2 確認した範囲では、前注でも名前が出たベロウソフによる「フォークロア研究の立場からのアネクドート研究」、そしてクルガーノフ (E. Kurganov) による「文学研究の立場からのアネクドート研究」がある。

(1) 叙述型とは、以下のように3人称の形で語られるタイプのものである。

① フルシチョフが模範的養豚場で仔豚たちに囲まれている写真の添え書き。

「右から3番目…フルシチョフ」(1961年) [Shturman, p. 233]

② ある男が塀に「フルシチョフはバカ」と落書きした。

この男は逮捕され、懲役11年となった。うち1年は国の財産である壁を汚したため。残り10年は国家機密漏洩罪で。

男が1年目の刑期を終えた頃、フルシチョフがイギリスを公式訪問した。

まもなくこの落書き男は釈放された。それは国家機密がもはや機密ではなくなったからだ。[ブラーソフ、⑤7]

(2) (叙述+) 対話型はシチュエーション・ギャグの一種といえる。つまり、一定の状況の中で、政治家といった有名人や、アネクドートでおなじみのキャラクター(チャパーエフ、チェブラーシカ、ヴィニ・プーフ、「チュクチ人」、「ユダヤ人」等)、あるいは「夫婦」「親子」「夫と義理の母」といった登場人物たちが出てきて対話を展開する。始めの1, 2行の叙述で登場人物、状況が提示される場合が多いが、例④のように、叙述が無く、対話中の呼びかけなどで状況が示される場合もある。

③ ブレジネフがコスイギンにいった。

「国境を開放するように世論が要求しているが、もし自由に出国を許すと、わが祖国には我々二人しか残らないのじゃないかね？」

するとコスイギンがいった。

「二人しか残らないというが、それは君と、ほかにだれなんだい？」[川崎、pp. 156-157]

④ 「レオニード・イリイチ、あなたの趣味は何ですか？」

「自分についてのアネクドートを集めることだよ」

「それでたくさん集まりましたか？」

「ラーゲリ 2つ半分だ」(1972年) [Shturman, p. 261]

(3) Q&A型には状況設定は無く、突然質問から始まり、それに対する回答で終わる。質問者は無個性の「一般人」であり、素朴な、時には的外れな質問を投げかける。回答者は、いかなる質問に対しても必ず答えてくれる「賢者」のような存在であるが、ひねった回答、意地悪な回答、ナンセンスな回答を返す。

⑤ 「ロシア式ビジネスって何ですか？」

「ウォッカのケースを盗んで、売って、その金で飲むことです」[大森、p. 34]

⑥「ゴルパチョフの政策の本質とは何ですか？ 進歩ですか、それとも欺瞞？」

「それは欺瞞の進歩です」[大森、p. 10]

このような Q&A 式ジョークはロシアに限ったものではなく、たとえばアメリカでは「エレファント・ジョーク」「チキン・ジョーク」と呼ばれる、ナンセンスな Q&A 式ジョークがよく知られている⁽³⁾。

以上のような型が見られる中、ソ連時代のアネクドートにおいては(2)(叙述+)対話型、(3) Q&A 型が比較的多くみられるようだ。

3. 「アルメニア・ラジオ Армянское радио」シリーズ

上述の Q&A 型アネクドートはソ連時代に生まれたもので、「アルメニア・ラジオ」と総称される（本報告では「アルメニア・ラジオ」シリーズと呼ぶことにする）。ソ連においては「アルメニア・ラジオ」と呼ばれるが、亡命ロシア人の間では主に「ラジオ・エレバン」と呼ばれている。

アネクドートの語り手の多くは都市部の男性であり（この点、主に農村部の女性によって歌われるチャストゥシカとは対照的である）、気の置けない仲間を相手に「休憩・喫煙スペース」「台所」「別荘」「釣り」といった場において語られる。「アルメニア・ラジオ」シリーズのテーマは多岐にわたるが、特に「政治」「経済」「エロス」「ホモセクシュアル」にまつわるものが多い。

「アルメニア・ラジオ」シリーズは基本的に、「リスナーからアルメニア・ラジオへの質問」と「アルメニア・ラジオからの回答」で構成される。多くの場合⑦のように、アルメニア・ラジオへの質問 Армянское радио спрашивает... というフレーズで始まる。

⑦ アルメニア・ラジオへの質問：「フルシチョフは偉大な人物ですか？」

「まったくその通りです。この 40 年間というもの西側の資本主義諸国が我国の経済を衰退させようとして失敗に終わっていたのを、彼は 10 年足らずで達成したのですから」(1963 年)
[Shturman, p. 240]

⑧ 我が局への質問：「ニンニクをつまみにウォッカを飲むのは体に良い（полезно）ですか？」

回答：「大変有益（полезно）です。真っ暗闇の中でも塀の下からあなたを見つけやすくなりますから」[Olin, p. 25]

また次のような、「アルメニア・ラジオ」という表現を欠く Q&A 型アネクドートも、「アルメニア・ラジオ」シリーズとして認識されている。

3 たとえば次のようなものが有名である。「象とレモンの違いは？」「レモンは黄色い」／「なぜ象はマティニーにオリーブの実を入れないの？」「じゃあ君はオリーブの実を鼻から出したことがあるのか？！」／「どうしてニワトリは道を渡ったの？」「反対側に行くため」

- ⑨「給料だけで生活できますか？」
「試したことがないので分かりません」[«InfoMIR»]

「アルメニア・ラジオ」シリーズのアネクドートは、アルメニアなまりを交え、演劇的要素を加えるとより一層面白みが増すといわれるが、アルメニアなまりが不可欠というわけではない。アルメニアなまりについては後述する。

4. 「アルメニア・ラジオ」シリーズの趨勢

D. シュトゥルマンと S. チクチンの『政治的アネクドートの鏡に写ったソ連』(1987年)は、筆者が知る限りでは、唯一採録年代が付された貴重なアネクドート集である。以下、このアネクドート集の内容に沿って「アルメニア・ラジオ」シリーズの趨勢を概観してみたい。

(1) 「アルメニア・ラジオ」シリーズのアネクドートが初めて見られるようになったのは1930年代である。以下のようなものがある。

- ⑩ アルメニア・ラジオへの質問：「行列って何ですか？」
「それは、売り場へ到る共産主義的方法です」(1930年代) [Shturman, p. 85]
- ⑪ アルメニア・ラジオへの質問：「10月革命は何を市民にもたらしてくれたのですか？」
「以前は金持ちは店の正面から入り、市民は裏口から入った。今では市民は店の正面から入り、金持ちは裏口から入る」(1930年代) [Shturman, p. 85]
- ⑫ アルメニア・ラジオへの質問：「白海・バルト海運河を作ったのは誰ですか？」
「右岸を作ったのは(※ソビエト政権に対する)疑問を口にした連中、左岸はその疑問に答えた連中です」(1930年代) [Shturman, p. 148]

「アルメニア・ラジオへの質問」という表現にこだわらず、Q&A型という点だけに注目するのであれば更に年代は遡ることができる。筆者が見たもので最も古いのは1919年に採録された次のようなものである。

- ⑬ 「ポリシェビキとメンシェビキの違いは？」
「カラスノエンドウ(※飼料用)が多くて、小麦が少ないのがポリシェビキ、カラスノエンドウが少なく、小麦が多いのがメンシェビキ」(原文 Больше вики – меньше хлеба, меньше вики – больше хлеба) (1919年) [Shturman, p. 129]

(2) 1950年代後半～

「アルメニア・ラジオ」シリーズに限らず、アネクドートの採録数は1950年代後半以降目

立って増えている。その背景には、1953年スターリン死去による恐怖政治時代の終焉と粛清犠牲者の名誉回復、エレンブルグの小説『雪解け』（1954年）に象徴される「雪解け時代」の始まり、1956年2月第20回共産党大会および1961年第22回共産党大会におけるフルシチョフの「スターリン批判」等々に由来する開放的な雰囲気があったと考えられる。ワイリとゲニスの共著書『60年代』においては、1956年から1964年までに現れたポスター、宣伝文句、新聞、ラジオ放送、演説といった、ありとあらゆる言説が取り上げられている。それらは、明るい未来への期待感とオプティミスティックな気分にあふれ、あらゆるメディアが笑い、時に理由の無い笑いに満ちていたと指摘されている [Vail and Genis, p. 142]。

『政治的アネクドートの鏡に写ったソ連』は、たとえば「共産党」「経済と計画」「農業」といったテーマ別、また政治家別にアネクドートが分類されている。参考までに「レーニン」「スターリン」「フルシチョフ」「ブレジネフ」の項目に納められたアネクドートの数を比較してみると以下ようになる。

項目	全体数	「アルメニア・ラジオ」シリーズ数	「アルメニア・ラジオ」シリーズ採録年、()内は話数
レーニン	49	6	1962(1)、1969(2)、1970(3)
スターリン	49	4	1953(1)、1956(2)、1958(1)
フルシチョフ	104	42	1950年代末(1)、1957年(4)、1959(1)、1961(3)、1962(3)、1963(10)、1964(19)、1965(1)
ブレジネフ	86	24	1964(1)、1965(2)、1968(1)、1969(1)、1970(2)、1972(1)、1976(3)、1978(1)、1980(1)、1981(3)、1982(6)、採録年不明(2)

やはりスターリン死後、フルシチョフ時代に特に多いことが分かる。このことは、先に述べたこの時代における開放的な雰囲気とともに、フルシチョフ自身のアネクドートに馴染みやすいキャラクターが一役買っているものと考えられる。

さらに忘れてはならないのが、60年代の主要マスメディアとしてのラジオの存在である。中でも広く聞かれていたのが、一般リスナーからの質問にラジオが答えるという形式のプログラムだった。その内容は多くの場合、ソビエト共産党の政策や方針に沿った紋切り型のものであったといわれ、このような当時のラジオ放送のパロディとして、「アルメニア・ラジオ」シリーズが流行ったという側面も忘れてはならないであろう。

(3) 現在

1980年代後半のペレストロイカ、1991年のソ連崩壊を経る中でアネクドート集の出版はうなぎ上りに膨れ上がった。また現在ではアネクドート関連のサイトも無数にあり、その正確な数を把握することも困難である。中でも最もポピュラーなサイトのひとつといわれているのが、「Анекдоты из России」 (<http://www.anekdot.ru>) (1997年～) である。この中で「アルメニア・ラジオ」で検索してみると1027話(アネクドート全体数は不明)がヒットし(2007年7月現在)、以下のような現代のアネクドートを読むことができる。

- ⑭ アルメニア・ラジオへの質問：「ブレジネフとプーチンでは、どちらが賢いでしょうか？」
「ブレジネフです。演説の際も草稿を見て、頭がいいふりなどしませんでした」(2006年6月6日)
- ⑮ アルメニア・ラジオへの質問：「ボリス・アブラモヴィチ・ベレゾフスキーが2008年に大統領になる可能性はありますか？」
「ずばり、あります！ ただしヴラジーミル・ヴラジーミロヴィチ・プーチンが彼を候補者に指名すればの話ですが」(2006年6月22日)

また、「InfoMIR」(<http://infomir.org.ua/Anekdot/>) という、やはり大きなアネクドット関連サイトにおいては、アネクドット全7057話中282話が「アルメニア・ラジオ」シリーズの項目に収められている。

これらのサイトにおける「アルメニア・ラジオ」シリーズの数について、多いか少ないかを言うことはできない。しかし、今日でも「アルメニア・ラジオ」という語が、アネクドットというジャンルの中で一定の意味を持つタームとして機能していることは分かる。

5. 「アルメニア・ラジオ」シリーズの背景：何故「アルメニア」？

さてQ&A型のアネクドットは、なぜ「アルメニア・ラジオ」と呼ばれるのであろうか？ まことしやかに伝わる伝説によれば、それはエレバン放送のアナウンサーの言い間違い（「資本主義においては人が人を搾取しているが、社会主義においては状況は全く逆なのです」というもの。つまり「人が人を搾取」していることには変わらない）が、一気に全国に知れ渡ったことから生まれたという。しかし、これはもちろん伝説の粋を過ぎず、この話自体がアネクドットとあってよい。

ではなぜ「アルメニア」なのか。それにはロシア人における「アルメニア」に対するイメージを確認しておく必要がある。

(1) 「アルメニア人」のイメージ

まず、アネクドットなどにおいて見られる、ロシア人における「アルメニア人」のイメージをまとめてみると、見た目としては「小太り」「生き生きとした表情」「こずるい顔」など、気質としては「愛国心が強い」「誇り高い」「ユダヤ人を凌ぐ計算高さ」「男らしい」などが挙げられる。その他にも「好色」「太目の女性好き」「ホモが多い」「グルジア嫌い」がある。このようなひと癖もふた癖もありながら、どこか憎めない「アルメニア人」のイメージをよく表すアネクドットとしては、次のようなものがよく知られているという。

- ⑯ アルメニア・ラジオへの質問：「世界一最低の国はどこですか？」
「その代わり、私たちの歌は素晴らしい」[筆者聞き]

このアネクドットでは「アルメニア・ラジオ」自身、アルメニアが最低だと自ら認めてい

るが、直接の回答は避け、「でも自分たちの歌はいい」と言い訳している点が笑いを誘うのである。

(2) 「アルメニアなまり」の魅力

またロシア人が感じる「アルメニアなまり」の魅力も忘れてはならない。グルジア人がロシア語を話す際の「グルジアなまり」同様、アルメニア人がロシア語を話す際の「アルメニアなまり」は、ロシア人にはたまらなくおかしく、笑いを誘うという。

映画を例に見てみよう。グルジア人とアルメニア人の友情を描いたヒューマン・コメディの秀作『ミミノ Мимино』（1977）には、ロシア人における「グルジア人」「アルメニア人」の典型的イメージが凝縮されているという。ここでアルメニアの名優 Фрунзик Мкртчян 演じる、アルメニア人トラック運転手ルーベンの台詞を見てみると、「軟音の硬音化」（たとえば нет を нэт と発音）、「文法的間違い」（「в этом гостинице」や「Я тебе один умный вещь скажу, ...」など）が随所に出てくる。外国人にはなかなか分かりにくいのが、こうした発音や文法的間違いがある度に、映画館は爆笑に包まれたという。

(3) 「アルメニアなぞなぞ」の伝統

以上のような、ロシア人における「アルメニア人」の憎めないイメージや「アルメニアなまり」の魅力を、仮に「アルメニア・ファクター」と呼ぶことにしよう。このファクターをふまえた「アルメニアなぞなぞ Армянские загадки」と呼ばれる、ロシア人の間で語られてきた伝統的ジョークがある。これはソ連のロシア人、また亡命ロシア人のあいだの双方で見られることから、1917年の革命以前から語られていたフォークロアの一種と考えられる。

「アルメニアなぞなぞ」は、ロシア人演じる「アルメニア人」と「ロシア人」の間の質疑応答から構成される。具体的には、まず「アルメニア人」が「ロシア人」に対して問題を出し、「ロシア人」が答えられずにいると、「アルメニア人」が（ナンセンスな／ひねった／強引な／屁理屈だらけの）正解を披露するというものである。たとえば次のようなものがある。

⑰ 「これなんだ？下が4本足。上はコレラ」

（答え）「カラペット（※アルメニア人によくある男性の名前）の妻が馬に乗っているところ」

[Kalbouss, p. 448]

⑰の面白さは分かりにくいのが、コレラ холера は特に女について「いやな奴」を指す場合があり、またカラペットの「カラ」という音は、ロシア人には滑稽に響く（たとえばカラプースは「肥満児」「おデブ」の意味）点に面白みがあるようだ。

また次のふたつの「アルメニアなぞなぞ」は、「アルメニア・ラジオ」シリーズのアネクドート中にも類話が見られる。

⑱ 「どうして南京虫は平べったいのか？」

（答え）「上に人が寝るから」 [Kalbouss, p. 448]

⑨「アルメニアにおいて共産主義体制を敷くことはできるか？」

(答え)「できます。でも先ずグルジアで試すのが良いでしょう」[Kalbous, p. 448]

「アルメニアなぞなぞ」において重要なのは、「アルメニア人」役のロシア人が、わざとらしいアルメニアなまりを駆使して滑稽に演じることであり、それによってより大きな笑いが引き起こされるのである。

さて「なぞなぞ」といえば、ロシア・フォークロアにおいても「なぞなぞ загадки」と呼ばれる伝統的なジャンルがある。たとえば次のようなものがある。

⑩「鉄でできた雄牛 でも尻尾は巻き毛」⇒(答え)「糸のついた針」

「12羽のワシと 52羽のコクルマガラスと それに365羽のムクドリが1個の卵を持ち去った」

⇒(答え)「1年」

「使った人は売らなかった 買った人には必要ない 必要な人は ほしいがない」⇒(答え)「棺おけ」[青木, p. 42]

このような伝統的ななぞなぞが、「アルメニアなぞなぞ」と質的に異なるのは明らかである。前者は「知恵をしばって正答を当てる」ことに重点が置かれている。それに対して、「アルメニアなぞなぞ」で重要なのは、答えを当てるのではなく、「アルメニア人」のおかしな仕草や言葉、珍妙な解答で、周囲の人間を「笑わせる」ことである。「アルメニアなぞなぞ」と共通性を持つフォークロア・ジャンルを探すとすれば、その強引で屁理屈だらけの回答は、子どものフォークロア детский фольклор におけるなぞなぞに近いといえよう⁽⁴⁾。

「アルメニアなぞなぞ」の形式そのものは、さらに古く遡ることができる。ペロウソフによれば、19世紀半ばのいわゆる「ジョーク・ネタ本」の中には、「アネクドート」とはまた別に、「質問と答え遊び」の項目があり、その中に「アルメニアなぞなぞ」タイプの質疑応答型ジョークが収められていたという。しかし、それらがアルメニア・ファクターと関わるか否かはまだ確認できていない。

以上、「アルメニア・ラジオ」シリーズの背景を概観した。その結果、そこには、愛すべき「アルメニア人」キャラクターと「アルメニアなまり」の魅力から成る「アルメニア・ファクター」があり、そしてこのファクターによって成立した「アルメニアなぞなぞ」が存在することが分かった。これらとソ連時代の恐怖政治、困難な社会生活、あるいは60年代の開放的な雰囲気、ラジオの流行といった、あらゆる要素が結びついて生まれたのが「アルメニア・ラジオ」シリーズのアネクドートだったといえよう。

4 子どものフォークロアにおけるなぞなぞにおける「強引で屁理屈」な回答例としては次のようなものがある。『「1本足で黒くてピカピカしてるの何だ?」「?」「1本足の黒人。」「じゃあ2本足で黒くてピカピカしてるの何だ?」「2本足の黒人!」「違う。1本足の2人の黒人」「じゃあ3本足で黒くてピカピカしてるの何だ?」「1本足の3人の黒人!」「違う。ピアノ」(以前はここまでだったが、近頃ではまだ続く)「じゃあ4本足で黒くてピカピカしてるの何だ?」「ピアノを弾いてる1本足の黒人?」「違う。酔っ払った炭鉱夫が現場からうちに帰るところ』」[Shmeleva, p. 100]

6. おわりに

ロシア人がアルメニア人、アルメニアなまりに対して抱いているユーモラスなイメージに基づき、また「アルメニアなぞなぞ」の形式を受け継ぐ形で、ソ連時代、「アルメニア・ラジオ」シリーズのアネクドートは生まれた。その最盛期を支えたのは60年代の開放的な雰囲気とラジオ人気だった。しかし、もっとも根幹のところでのこのシリーズを支え続けていたのは、おそらく、ロシア人におけるソ連体制に対する批判、生活に対する不満の感情だった。「アルメニア人」という同じ国に住む、したがって問題を共有する異民族の仮面を被ることで、「笑い」を武器に、婉曲的ながらも痛烈に体制を批判、揶揄することが可能になったのではないか。「アルメニア・ラジオへの質問」というお決まりの出だしそのものが、ソ連時代においては、反体制的な内容を予測させる指標としての働きを持っていたであろう。しかし「ソ連」という明確にして巨大な批判対象は失われ、また1991年アルメニアの独立によって、ロシア人とアルメニア人の「同胞」関係が解消したロシアにおいては、「アルメニア・ラジオ」シリーズはその形式は維持しつつも、以前ほどの痛烈さを失い、また「アルメニア・ファクター」に由来する笑い以外には「アルメニア」にこだわる必然性も無くなり、半ば形骸化したといわざるをえない。今日ではロシア人でも若い世代になると「アルメニア・ラジオ」が何かを知らない人がいるという。

このように口承伝承とは周囲の状況に応じて刻々と変化を続ける。リアルタイムの口承伝承を研究の俎上に載せるのはなかなか難しいが、「ソ連時代のアネクドート」はいわば過去のジャンルとして、これから本格的な集成、総合的な研究が期待できる分野といえよう。

主要参考文献：

- A. Belousov, "Sovremenniy anekdot," in *Sovremenniy gorodskoi fol'klor* (Moscow, 2003), pp. 581-598.
- Elena F. Hellberg, "The Other Way Round: The Jokelore of Radio Yerevan," *Scandinavian Yearbook of Folklore* 41 (1985), pp. 89-104.
- George Kalbous, "On 'Armenian Riddles' and Their Offspring 'Radio Erevan'," *Slavic and East European Journal* 21-3 (1977), pp. 447-449.
- N. Olin, *Radio Erevan: Prodolzhaet govorit' i nachinaet pokazivat'* (? : Vamizdat, 1975).
- E. Shmeleva and A. Shmelev, *Russkii anekdot: Tekst i rechevoi zhanr* (Moscow, 2002).
- D. Shturman and S. Tikhtin, *Sovetskii Soiuz v zerkale politicheskogo anekdota*, second ed., revised with additions (Jerusalem: Express, 1987).
- Andrei Sinyavsky, *Soviet Civilization: A Cultural History* (translated from the Russian by Joanne Turnbull with the assistance of Nikolai Formozov) (New York: Arcade Publishing, 1990).
- P. Vail' and A. Genis, *60-e. Mir sovetskogo cheloveka* (Moscow, 1996).

青木明子「ロシアのなぞなぞ」『なろうど』(ロシア・フォークロア談話会会報)第37号、1998年、42-43頁。

大森正義他編訳『アネクドート 119:ロシアのジョーク』東京プログレスシステム、1997年。

川崎浹『ロシアのユーモア』講談社選書メチエ、1999年。

今田和美「ソ連アネクドット研究史概観」『現代文芸研究のフロンティア（Ⅱ）』（北海道大学スラブ研究センター研究報告シリーズ）第76号、2001年、32-45頁。

エドワード・ブラーソフ「詳解！ロシアのアネクドット①～⑩」『しゃりばり』（北海道総合研究調査会）第208号～第293号、1999年～2006年（休載号あり）。